

第2章 学校への提言

うなど、双方でしっかりと議論し作り上げていくことが求められる。共同担任体制、すなわち「複担任化」である。

事務処理、昼食・清掃・学級活動等の指導を共同して実践し、とくには交代するなどして、副担任は「複」担任としての役割を意識すべきである。それによって担任も一人で問題を抱え込む危険を回避することが可能となる。

5 「多忙」から「充実感」、「やりがい」のある仕事へ

教員の多忙は、本件中学校だけの問題ではない。本件中学校の教職員組織として、本件中学校独自の自浄作用が働いているのかどうか、考える問題であろう。これは、第三者委員会が指摘する問題ではなく、本件中学校の教職員自身の振り返りの中で求められる答である。

考える糸口を挙げておきたい。

教員が仕事を進めていくときにも、効率が求められることがある。効率的に進めていかなければならない仕事内容とそうでないものがある。子どもたちと直接対応する教育指導は、効率よりもその内容、方法や子どもたちとの関係づくりにか点が置かれ、相当の時間が必要とされる。また、報告書作成などの事務作業は、効率的に進めていく必要がある。いずれにしても、その時々優先順位（プライオリティ）を考え、仕事を進めていくことが大切である。「忙しさ」と「多忙感」は少しニュアンスが違うように思う。「忙しさ」を多忙と感じる時とそうでない時がある。それはなぜか。「忙しさ」の中に「充実感」や「やりがい」を感じた時には、その忙しさは疲れとして残らないことがある。そうだからといって、忙しくていいというわけではないが、同じ仕事に充実感が味わえるような工夫が必要である。生徒のためになること、保護者や地域の方々から感謝されること、同僚から認められること等は、「やりがい」につながる。

1 学校とは何か

前述したとおり、学校とは本来、子どもにとって最も安全で安心な場所であればならない。日々すべての子どもたちが生きて、成長する場でなくてはならない。その意味で、いじめの問題は、学校の中で解決していかなければならない問題であり、当事者となった、加害生徒、被害生徒に対する適切な教育を施していくことが大事である。学校は何かあってもその問題から逃げることなく、正面から生徒、保護者に向かい合うという意識を持たなくてはならない。学校が、子どもたちと一緒にやっついていく、子どもと共に考えていくという姿勢を決して忘れてはならない。この思いこそが、学校で貫かれるべきではないだろうか。

2 仕事の「選択と集中」による教員の多忙の改善

教員の仕事を軽減するために、教育委員会からの依頼文書をはじめ、学校における仕事を「選択と集中」という観点で捉え直し、優先順位を考え、集中して徹底的に行う事柄とそうでないものを仕分けし、学年、分掌等のそれぞれの単位で考えることが大事だと思われる。

また、多忙化の問題を考えるときに、「行事の精選」の事柄が必ず出てくる。たとえば、本件中学校では体育祭と文化祭が連続する2日間にわたり実施されていた。教員は多忙を極め、生徒は行事から深く得ることができなくなるだろう。か。「経費主義」「行事主義」の悪弊に陥っていきなかつたらどうか。一つ一つの行事の質を高めることでこそ、人間関係づくりやいじめを許さない人権感覚が高まるのではない。

限られた時間の中で多くの行事を取り入れていくことは困難なことであるが、生徒の状況や生徒の希望を聞き、学校全体で「今、わが校の問題点・課題は何か、その解決に何が必要か？」と議論をする中で必要な行事とそうでない行事に分けていくことが大切であることは言うまでもない。さらに「部活動」についても教員への負担は大きい。多感な中学生の部活動の教育的意義が大きいことも周知のとおりであるが、こども「選択と集中」が求められる。

3 教育相談

(1) 教育相談の機会

中学校学習指導要領解説編によれば、教育相談は「一人ひとりの子どもの教育上の諸問題を取り上げ、本人又はその親がその望ましい在り方を見出すことができるよう指導・援助すること」で、「個人及び集団のすべての児童生徒を対象に行われるものであり、すべての教員が、いつでもどこでも行うものである」とされる。

学校には、学級担任、副担任、各教科の教員、教育相談担当教員、養護教諭、生徒

指導主事、スクールカウンセラー、部活動顧問など様々な立場の教職員がいる。子どもたちにとっての相談資源は整っている。学校教育活動のあらゆる時と場が相談の機会であり、豊富な相談相手が見つまっているのにも関わらず、どうして教育相談が機能しないのであろうか。

年間2回程度の教育相談週間などが開催されている学校もあるが、進路相談等にすり替わってしまっていることもある。「教師は、話すことは得意だが、聴くことはうまくなく、ついしゃべってしまおう。」と話した教員がいた。もう一度「聞く」ではなく、「聴く」ことの重要性について考える必要があるだろう。さらに、生徒が話しやすい環境をどう作っていくのか、ちょっとした出会いでの何気ない会話が大切である。業間休みの廊下ですれ違ったとき、掃除の時間に手伝いながらの時間、部活動が始まるほんの少しの時間、昼食を食べながら等、しかしこのときは教員にとって大変化しいときでもある。だからこそこの短時間を生徒と共有する大切な時間であることを認識し、生徒と話してみてもどうか。

もう一点、提案をする。生徒の側から見たときの教育相談は、生徒が先生に「相談したい」と思ったときが一番旬の時であるといわれている。誰に相談するか、誰と話をするかが大きな問題である。教育相談週間は学校職員であれば誰にでも相談、話が出来るようにし、「○○中コンソナル週間」とし、校長、教頭、養護教諭、事務職員の方、学校用務の方、部活動の担当教員、他学年のあまり話したことのない教員など、生徒が話したいと思える取組を考え出してはどうだろうか。まさに「子どもが相談したいと思うときが、相談のチャンス」なのである。「相談の基本は自主来談にある」と言われるが、生徒とこのころの距離がずっと近くなるはずである。

子どもたちは健気だ。聴き取り調査の中でも、多くの子どもたちが「今、先生たちはどうして欲しいと思いますか。」との問いに、「生徒に向き合う時間をたくさん作って欲しい。」「僕たちと遊んで欲しい。」と答えている。この子どもたちの声にどれほど真剣に向き合うか否かが、学校再生への道の岐路である。また、その課題に誠意をもって望むならば、失われかけた信頼であるが、今後の子どもたちの信頼は回復されるであろう。子どもは、本来的には「教師が好き」「学校が好き」なのである。

(2) 思春期特性(心性)を理解する

適切に教育相談に応じるためには、その基礎に「思春期の子どもの特性」への適切な理解がなければならぬ。今一度、小学校高学年から中学校にかけての子どもの特性についておさらいしておきたい。

ア 思春期の子どもは発達過程にすることを理解する

思春期の子どもを指して、「体は大人でも心は子ども」とよく言われる。成人の脳になるには、10代の後半であり、医学的にみても思春期の子どもの脳は発達

途上にある。このころの子どもは抽象的思考ができてきつつあり、日常的なものの見方、考え方において影響し合っている時期でもある。ところが、脳内物質のドーパミンの働きが強くなる時期でもあり、物事に対する興味、好奇心などが高まるのである。思春期はこのように大人の世界をのぞいてみたくなる時期である。一方、行動を抑制する働きはまだ十分ではないので、直ぐに行動に突っ走ってしまう特徴がある。このころの子どもは、大人の真似をして「酒、タバコ」に手をだしてみたいものも、こうした要因が関係していることが理解できよう。好奇心が旺盛なため、大人よりずっと早い速度で依存症になってしまいう危険が大きい。また、チックなどの軽い症状が出る場合もあるが、統合失調症のように重篤な疾患が出現する時期でもある。このように思春期は、危なかしい時期でもある。

こうした発達上の課題を理解しながら、子どもに向き合いたいものである。好奇心が旺盛とか、行動の抑制が効かないということも、思春期の子どもの特徴であるが、発達の課題を考えないで、大人の価値観に無理に押し込めたりすると、どうしても歪みが出てくることは避けられないことである。

イ メリハリの利いた対応に心掛け、本音で話す

こうした子どもに接するとき、こちらが曖昧な態度でいると、子どもはその姿勢を見抜いてしまう。口では「いいよ」と言いながら、態度では受け入れないという表と裏の使い分けをする態度が一番良くないものである。子どもたちが、学級日誌に日々のあったことを記しているが、それに対する回答の有り様をみると、子どもたちに向き合っていないか理解出来る。子どもたちは、「駄目なもの」は駄目」とはつきり言うてももううことを待っているものである。もちろん、優れた成果を挙げた時には、手放しで喜びを共にすることが、子どもの豊かな心を育てる基となる。つまり、嘘のない、メリハリの利いた対応の出来る大人が必要である。子どもに向き合い、本音で語り合うことが出来る。子どもの世界は十分な満足感で満たされるものである。

ウ 友人関係の変化に注視する(気づく)

このころの子ども同士の間は深く、強くなっていくのが特徴である。今までの友達関係が大きく変わる時期でもある。

しかも、そのことを親には隠しておこうとする。このことは、成長過程では当然のことでも、今まで何でも話してくれたのにと悩む必要はない。親には、秘密のことだと思っても、仲間内ではそれを共有することがある。この時期、親より友達が大切だと主張するのも、あながち間違っていない。このころの子どもの相談する対象の人に友達を挙げているのも、思春期の子どもの特徴である。(指定都市教育研究所連盟編『子どもがとらえた教育環境』2000)